

特別支援学校における新学習指導要領に基づいた教育課程編成の在り方に関する実際研究

話題提供者

研究報告：柘植 雅義(国立特別支援教育総合研究所)
原田 公人(国立特別支援教育総合研究所)
長沼 俊夫(国立特別支援教育総合研究所)
実践報告：大森 勝子氏(茨城県立協和養護学校 教諭)
河野 隆弘氏(千葉県立千葉聾学校 教諭)
指定討論：竹林地 毅氏(広島大学大学院教育学研究科 准教授)

司会

柳澤 亜希子、滝川 国芳、原田 公人(国立特別支援教育総合研究所)

第3分科会では、研究代表の柘植上席総括研究員より、まず本分科会の趣旨について説明を行った。次いで、研究報告として、原田総括研究員より平成22年度に全国の特別支援学校を対象に実施したアンケート調査の結果と研究成果報告書の概要について、長沼総括研究員より主に同調査の自由記述の分析結果について報告がなされた(以上、要項p40-44)。

実践報告として、大森教諭より特別支援学校(知的障害)における児童生徒一人一人の教育的ニーズに対応した教育課程編成の取り組み、具体的には高等部の類型化(職業コース、作業コース、自立活動コース)の実施とその効果について報告がなされた。一方、河野教諭からは、特別支援学校(聴覚障害)における幼稚部から高等部(専攻科)までの各発達段階を配慮した教育課程編成として、各部での取り組みの状況と学部間連携の工夫、自立活動の時間の確保について報告がなされた(以上、要項p45-48)。

〈参加者からの質疑及び応答〉

参加者：協和養護学校では高等部を3つのコースに分けているが、高等部1年生から実施しているのか。また、どのような基準で各生徒のコースを決定しているのか。

大森氏：1年生から実施している。コース分けは、入学選考の結果、教育相談、中学部からの調書等を踏まえて総合的に判断して決定している。ただし、試験の結果を優先するのではなく、個々の生徒にとって、どのコースが最もその生徒の能力を発揮できるのかを考慮して決定している。

参加者：コース分けをして卒業後の進路に変化があったか。また、今年度の状況はどうか。

大森氏：職業コースは5名中4名が就職し、1名は2年後に就職予定である。作業コースと自立活動コースは全員、作業所や通所施設等へ進むことが決まっている。ただし、作業コースだからといって就職が難しいというのではなく、その可能性があることに留意する必要がある。

参加者：今後の課題について教えてほしい。

大森氏：職業コースは、時数の確保が難しいため時間割を含めて検討が必要である。作業コースは、家庭生活への移行やQOLの向上を踏まえた教育課程編成と指導内容の検討が必要である。

原田総括研究員より、千葉県立千葉聾学校の取り組みについて、教育目標・時数・指導内容の3つのバランスをとっていること、外国語活動を先行実施していることが補足された。

〈指定討論〉

竹林地氏からは、特別支援学校(知的障害)における教育課程に期待することとして、①創造的で夢のある教育課程の編成、②卒業後の生活に結びつく教育課程の編成、③わかりやすい教育課程の編成の3点について言及がなされた。また、特別支援学校(知的障害)では、特別支援学級から進学してくる生徒の数が増加していることから、中学校の特別支援学級と高等部との接続を意識することの必要性が述べられた。

〈まとめ〉

柘植上席総括研究員より、障害のある幼児児童生徒の指導、支援を深化させていくために教育課程の改善が重要であること、今回の研究を踏まえて次年度の研究に発展させていくことが述べられた。